

優秀修士論文概要

『オセロー』に見る男らしさのジレンマ

—— 矛盾に満ちた理想の悲劇 ——

鍛 冶 佳 穂

ウィリアム・シェイクスピアの戯曲『オセロー』の主人公オセローの複雑な人物像は、数多くの議論を巻き起こしてきた。オセローは、高潔で愛情深いキリスト教徒として登場するが、イアーゴの嘘を信じ込み、嫉妬に駆られて無実の妻を殺害した挙げ句に自害するという結末を迎える。ヘレン・ガードナーをはじめとする批評家たちは、オセローを偉大な英雄として論じた。一方で、アンソニー・ジェラルド・パーソロミーらは、オセローの人物像は当時の差別的な人種ステレオタイプを反映した否定的なものであると論じた。しかし、オセローの人物像、延いては嫉妬という悲劇の原因に、当時広く受け入れられていた男らしさの規範⁽¹⁾の変容と矛盾という問題が深く関わっていることを指摘する先行研究はほとんどない。そこで本論では、当時の社会では男らしさの規範の遵守がきわめて重要視されていた一方で、その規範自体は本作が書かれた初期近代を境に大きく変容しつつあり、数多の矛盾を抱えていたことを指摘し、こうした矛盾が本作の中心的な主題の一つとなっていることを明らかにした。

第一章では、当時の男らしさの規範に生じていた変容と矛盾を概観し、それが本作の悲劇の最大の要因となっていることを論じた。初期近代には、武勇を最重要視する理想が衰退し、優美さを最重要視する新しい価値観が台頭し始めていた。ただし戦時には未だ武勇重視の古い理想が適用されたため、男性たちは、優美さと武勇を併せ持つことを求められた。しかし両者は両立が困難なほどに正反対の性質であり、現実には、平時には武勇が、戦時には優美さが軽視されがちであった。また、価値観の変容と矛盾は、結婚に関する男らしさの規範にも生じていた。中世までは独身に劣るとされた結婚が、神の御心になかった最良の選択とされ、それに伴って妻への愛情や思いやりが重要視されるようになったのである。男性は妻との諍いを避け、できる限り妻の願いを叶えなければならないとされた。しかし一方で伝統的な父権制的理想も根強く残っており、男性は妻の意思を完全に服従させねばならなかった。支配に失敗した場合には男性失格の烙印を押され、嘲りの的となった。即ち男性は、新しい規範である妻への献身と、旧来の規範である妻の支配という背反する二つの規範に同時に従うことを求められたのである。

オセローは、イアーゴでさえ理想的な夫と認めるほどに愛情深く高潔な性格であるにもかかわらず、妻よりイアーゴの言い分を信じてしまう。その最大の理由は、戦争の終結とキャシオーの失脚がもたらした変化にあると考えられる。これらの変化は、男らしさの規範の矛盾を浮き彫りにし、デズデモナが魂と運命を捧げたと公言するオセローの「名誉と勇猛さ」(1.3.251)に直接的な影響を与えるものだ。第一の戦争の終結は、武人に相応しい資質である「勇猛さ」が軽視される平和の到来を意味する。代わってキャシオーの優美さが賞賛に値する男らしさとなるのである。第二のキャシオーの失脚は、オセローとデズデモナの夫婦関係を当時の基準での自然な形から逸脱させ、オセローの「名誉」を失わせる。キャシオーの復職を願い出るデズデモナへのオセローの態度は、結婚に関する新しい規範には適っているが、伝統的な規範に照らせば過ちだった。オセローは妻の意思を服従させられない不名誉な男と

になってしまうのである。以上の変化によって、オセローとの結婚は自然に反しているとしてデズデモーナの愛情の喪失を請け合い、オセローが男らしさを欠いていることをしきりに仄めかすイアーゴの言葉(3.3.233-42, 376; 4.1.57, 61, 73, 85)が効力を発揮するようになるのである。このように、イアーゴは男らしさの規範の変容と矛盾を利用できるほどに正しく認識している。その洞察ゆえに、武勇重視の古い規範が適用されるはずの戦場で、優美だが武勇の功績はないキャシオーが昇進することが自分の男らしさに影響を与えるという事実にも自覚的であった。このことが、先行研究ではしばしば動機を欠いていると見做されてきた、本作における大がかりな悪事の動機となっている。即ち、男らしさの規範の変容と矛盾は、悲劇の最大の要因であるオセローの嫉妬とイアーゴの悪意に深く関わる悲劇の根幹なのである。

第二章では、人種ステレオタイプを反映した野蛮さの発露と見做されがちなデズデモーナ殺害という行為が、当時の英国における結婚に関する男らしさの規範が抱えていた矛盾によって引き起こされていること、当時の観客がこの行為を完全に「他者」の悲劇として片付けるのを妨げる演出上の工夫がなされていることを明らかにした。当時の社会では、妻を支配する能力は職務能力と同一視されたため、妻の不貞は夫に地位の喪失をもたらした。また、妻の不道德の原因は夫の不道德にあるとされた。しかし現実には、職務能力に秀でた男性や道徳的な男性が必ずしも妻を支配できるとは限らなかった。また、「寝取られ亭主」に適用される規範も矛盾に満ちていた。妻の不貞が疑われる場合、不行動も嫉妬も避け、即座に不貞か貞淑を示す証拠を得る必要があり、不貞が示された場合には事実上の離婚か裁判という選択肢が存在した。しかし前者は不行動、後者は支配権の放棄(Foyster 198)というさらなる不名誉に繋がった。そのためいかなる行動を取っても規範からの逸脱は免れ得ず、一度妻の不貞がなされれば、例え男性の側に非がなくとも、名誉の回復は望めなかった。以上のような妻の行動の責任を夫に帰す理想論や「寝取られ亭主」への理不尽な規範は、男性の不安を煽り立て、妻への不寛容を助長した。さらに、夫婦間の愛情を宗教的な観点から重視する風潮は、不貞を倫理に悖る重罪と見做す意識を生んだ。女性の魂の救いは夫への服従に懸かっているとされ、命より貞節を重んじる女性の姿が理想像として提示された。

作中で、妻の不貞に関する疑惑を告げられたオセローは、不行動を避け即座に証拠を得ようとするあまり、誤った「証拠」を信じ込む。そして「寝取られ亭主」の規範のジレンマに陥り、そこから逃れようと、デズデモーナを娼婦、及び娼婦と同一視されることの多かった魔女と見做して殺害する。シェイクスピアは、デズデモーナを娼婦・魔女と関連付ける場面設定・台詞や、オセローを苛む結婚に関する男らしさの規範の矛盾やその不条理さを観客に意識させる台詞、女性の貞節に対する観客の不安を煽る構成などを用いることで、デズデモーナの娼婦化・魔女化、及び殺害が、当時の英国の価値観から見て過度に不条理に映ったり、オセローへの共感が完全に失われたりすることのないよう工夫している。オセローはアーロンなどの登場人物とは異なり、反キリスト教徒的価値観ではなく、英国の倫理重視の価値観に縛られるあまり妻の殺害に至る人物として描かれているのである。

第三章では、作中の白人たちとオセローの間に存在する多くの共通点について考察し、本作が黒人に対する白人の優越を描こうとはしていないことを指摘した。さらに、シェイクスピアが当時の社会に流布していたイタリア人に対する偏見を利用して、オセローを否定的なステレオタイプではなく、英国人キリスト教徒としての内面を持つ人物として表象していること、こうした表象を通して男らしさの規範の矛盾を批判していることを論じた。グラシアーノらがイアーゴに下す処罰は、オセローによる殺人と

同様に恣意的な判断に拠っている。ブラバンシオとオセローの葛藤や言動は酷似している。キャシオーはオセロー同様、男らしさの規範の矛盾が原因で重大な過ちを犯す。また『オセロー』に登場するイタリア人たちが優美だが不誠実という当時の偏見を想起させる言動を取る一方、オセローの人物像は、英国人の自己イメージを色濃く反映している。以上のことから、シェイクスピアは、男らしさの規範の矛盾が自国人に異教徒の如き罪を犯させかねないことを暗に警告するために、道徳的な罪の象徴としての黒い肌、英国人としての内面を持つオセローの悲劇を著したのだと考えられる。オセローを黒い肌の持ち主として設定した背景には、父権制社会の根幹にある男らしさの規範の矛盾を批判する本作が、検閲で体制批判と見做されるのを避ける意図もあっただろう。このような手法は差別思想の再生産に他ならないが、その主眼は、人種的他者への批判というよりは、国内の規範が内包する矛盾の批判に置かれていたと考えられる。

以上のように、オセローは偉大な英雄でも野蛮な他者でもなく、矛盾した規範に従おうとしてダブルバインドに陥る、当時の等身大の男性像といえる。残忍なイスラム教徒の登場を予期させる副題や台詞に反して、イスラム教徒は一人も登場せず、白人イアーゴが悪役に据えられ規範の矛盾を利用して国を揺るがす悪事を行うという本作の構成もまた、他者の脅威以上に自国の規範が抱える問題に目を向けるべきだというシェイクスピアの警告を表わしていると言える。

注

- (1) 本論では、登場人物たちの大半が属し、また功績と結婚を以てオセローが同化しようとしている中・上流階級の男らしさの規範を主に扱う。

引用文献

- Barthelemy, Anthony Gerard. *Black Face, Maligned Race : The Representation of Blacks in English Drama from Shakespeare to Southerne*. Louisiana State UP, 1987.
- Foyster, Elizabeth A. *Manhood in Early Modern England : Honour, Sex, and Marriage*. 1999. Routledge, 2014. *Women and Men in History*.
- Gardner, Helen "The Noble Moor." *Othello : Critical Essays*, edited by Susan Snyder, vol. 7, Garland Pub., 1988, pp. 169-88. *Shakespearean Criticism*.
- Shakespeare, William. *Othello, the Moor of Venice*. Edited by Michael Neill, Oxford UP, 2006. *Oxford World's Classics*.

優秀修士論文概要

エドワード・オールビー研究

中 西 亮 介

1958年に発表されたエドワード・オールビーの処女作『動物園物語』(*The Zoo Story*)は、59年のアメリカ初演に際し、そのビート・ジェネレーションの表象や現在で言うクィアな欲望は、価値観の統一が行われたアメリカにおいて、抑圧されたものの開放を謳いあげるものとして訴求力を持った。作品に対する先行研究はその歴史の中で、おもに不条理性が『動物園物語』を論じるうえで切り離せない重要な要素として確立されてきた。

また『動物園物語』はその社会批評的な側面にも焦点をあてられてきた。社会批評的な側面への注目とは、作品の不条理性を醸す部分とテキストの外の世界と結びつけて、その必然性を説明しようという試みである。それは確かに『動物園物語』を語るにおいて「不条理」／「条理」という抽象的な、個別の作品を語るには普遍的に過ぎる対立軸から、「ノーマルなヘテロセクシャル」／「クィア」という多分に1950年代に特有の具体的な対立軸、個別的な視座を引き出した。

現在でも有効な視座のように見えるが、対立軸が組まれていること自体に問題がある。作品におけるクィアな欲望を象徴する表現は、対立軸の中から抜け出ることを許されず、否認という形でヘテロセクシャル的規範を表裏一体に承認させられているのだ。先行研究では個別の身体がセクシャリティの枠組みで、あまりにも包括的、概念的に捉られてきた。

『動物園物語』のクライマックスではセクシャリティと関係を持たないのに劣らぬ熱量を帯びた新たな関係性が構築される。この作品は人と他者の関係構築の源としては顧みられることの無かった欲動を提示している。

本論文は今まで軽視されてきた、或いは否定的にのみとらえられてきた『動物園物語』に確固としてある「メロドラマ性」に焦点をあてることでそれらの存在を考察する。

先行研究において認められてきた『動物園物語』における「メロドラマ的」な性格は、ピーター・ブルックスが『メロドラマの想像力』において、「メロドラマ的」という形容詞を検討しながら見出してゆく意味と符合する。ブルックスは「メロドラマ的」という形容詞が指標する表現のモード、「メロドラマ的」モードの存在を主張する。

「メロドラマ的」モードは「隠喩」群を使って、現実世界の深層に「象徴的な領域」が存在することを示す。リアリズムの基準からすれば過剰な表現をふんだんに用いて表現した。それによって彼らは自らの作品を、作家の主観では世界に確かに存在する道德秩序、規則の様態と価値を示す寓話に仕立てる。

『動物園物語』は「メロドラマ的」モードを使用しているといえる。つまり「不条理の演劇」において唯一の「真理」が観念として客観的に共有されるというあるべき世界が逆説的に提示されているのに対し、『動物園物語』では、存在する個人の主観に依拠して無数の「真理」が並列する、1958年当時としては実にポストモダンの世界観が提示されている。

「メロドラマ的」モードを使用するにおいてオールピーは、無数の「真理」の依拠する個人の身体に注目し、身体を突き動かす欲動の存在を「象徴の領域」として、「隠喩」を用いて描く。それぞれの「真理」、欲動を持つ二つの身体のやりとりから、関係性に関する独自の「真理」を指定するために、過剰な表現をふんだんに用いる。身体に宿る個別の「真理」を把握し、それと関係づけながら見逃されてきた過剰な細部をこそ読み直してゆく。

『動物園物語』の「メロドラマ的」モードにおいて「隠喩」として著しく機能している要素「身振り」、「まなざし」それから「顔」の三つを焦点化したテキストの精読を、章を分けて行。まず、身振りへと焦点をあてた考察は、ブルックスが『メロドラマ的想像力』においてメロドラマにおける登場人物の身振りを、殆ど台詞に優越するほどの重要性をもつものとして注目していることにまず依る。ブルックスは「身振り」によって登場人物の身体は「テキスト表象の場」となると述べる。

『動物園物語』の二人の登場人物のうち、存在感の希薄さを指摘されてきたピーターは、作品を「メロドラマ的」モードに添って精読した際に俄然その存在感を増す。先行研究で重要性を置かれなかった膨大なト書きにはピーターの「身振り」が数多記されている。身体というテキストの読み込みは、ヒロイックなジェリーが凡庸なピーターを導いて劇のアクションを展開させてゆくという定説的な読解によって固定された作品の有り様を一変させる。

劇を支えているのは、ジェリーにとっては千載一遇の、ピーターの身体なのである。アクションは、ジェリーによるピーターとの豊饒な身体の見聞に始まる。ピーターの存在感のある身体に惹かれ、そのような身体を自らにも欲するジェリーと、根源的な承認への不満の解決をも仄かに期待するピーターは二人の欲動の成就のための特殊なやり取りを繰り返す。ピーターは「身振り」を、ジェリーはことばを以て応答するやりとりは、変奏を重ねるうちにジェリーに豊かな身体テキストを、ピーターに欲求の充足を与えながら、より極端なところへ、身体と身体——自己と他者の境の融解点、即ち生死の境へと二人を追い込んでゆく。この行程は全く不条理にではなく、寧ろ欲動の論理とでも言われるべきものに忠実に進んでゆく。クライマックスにおいて二人は「死」をつうじて欲動の成就の時間的有限性を出し抜き、また個性を超えたあたらしい身体を獲得するのだ。

まなざしは『動物園物語』においてジェリーのピーターに対するまなざしの存在が劇の冒頭から度々確認され、その裏にあるピーターという他者を所有しよう、コントロールしようという欲望が劇の展開に大きく作用している。一方で要所に登場するピーターの顔が彼の意図にかかわらずジェリーに対して特異な存在感を発揮し、そうしたまなざしのたくらみを挫き、劇を登場人物の誰も思ひの寄らぬ展開へと促す。

こうした「まなざし」と「顔」の作品内での混在によって、ジャン・ポール・サルトルの実存主義哲学における「まなざし」の概念が代表する自他の関係観と、それに対するエマニュエル・レヴィナスの倫理的な「顔」の概念が代表する自他の関係観の作品内での混在が示唆されている。作品内に共存する価値観の緊張関係は比喩そのもの（まなざし、顔）の間のそれとして隠喩されている。

ピーターに対して執拗な「まなざし」を向けるジェリーは、元々サルトル的な自他関係観の持ち主である。しかし彼の「まなざし」の先にピーターの「顔」が顕れたことでジェリーの内部で他者観が動揺し、責任を負って応答する形で会話を始めなければならなくなった。ジェリーは、希薄な自己の存在感を克服し承認の欲求を満たすためにピーターから「まなざし」を返されることをのぞみ、そのために「まなざし」を凝らし続けながら、要所で「顔」が出現するたびに動揺し、徐々に他者に対して負っている

絶対的な責任に自覚的になってゆく。劇が展開するにつれて激化する相克関係は、二人を殺すか殺されるかの境まで追い込む。そこでジェリーは自分が殺すはずのピーターの身代わりとなって殺される、という自殺／他殺の境界を揺るがす離れ業でピーターの「顔」に対して負った応答責任を果たすのである。レヴィナスの説く他者に対する応答は倫理のため、自己にとって義務があるばかりのはずだが、責任を果たしたピーターは自分が死体になってゆくという、いわば自己の他者化の過程に、希薄だった自己の身体が却って他者としての存在を持ってゆくのを死の間際に確認するというかたちで欲望を成就させたのだ。

精査してきた「隠喩」群は、作品を展開し主人公ふたりを、捕食／被食の関係と言えるものへと導いていることが分かる。この関係性を構築する基としていずれの場合も、身体を欲する、あるいは身体をこそ、既製の欲望では満たされない次元まで欲望されたいという、肉としての身体に着目する欲動が見出し得る。

反対に、『動物園物語』では性的な欲動やそれを基として築かれる関係が様々表象されているが、それらはいずれも二人の関係性を進展させる刺激としては不発に終わっていることもわかる。

戯曲においてオールビーはまず関係構築の源を身体から発する欲動にあると措定する。そして、その欲動として顧みられることの無かった類のもの——他者を対象とする広義の「食欲」を提示する。人の身体と他の身体の間にも野生動物同士のような捕食／被食関係を認め、そこに自己という有限性を超えんとして結ばれる他者との関係の本質を見出すのだ。

「動物園物語」は他者への「食欲」という奇抜な概念を一つの「真理」として提示するような作品なのだ。人が（人に限らず）他者を求める根本に、種の保存のための、いわば他者を増やすための一種社会的な欲動である性欲ではなく、ひたすら個体が生存条件を確保するための食欲を置いてみせたところにエドワード・オールビーの、他の追従を許さぬ独自性がある。

クィア的な或いはポストコロニアルな多様性のるつぼである現在の世界において、「食欲」という欲動が見出すセクシャリティその他のアイデンティティから逃れた肉そのものとしての身体は、その世界に存在する我々がどんな理念よりもまず単なる肉であることを思い出させてくれる。そのゆえに決して忘れてはならないものだ。オールビーの「動物園物語」を読み直すことで見出し得るひとつの「真理」は、こうしたアイデンティティ・ポリティクスの傾向に異議を申し立て、人の本質、また人と他者の関係性の本質について光の当たることの無かった新側面を照らし出す役割を果たす可能性を秘めている。